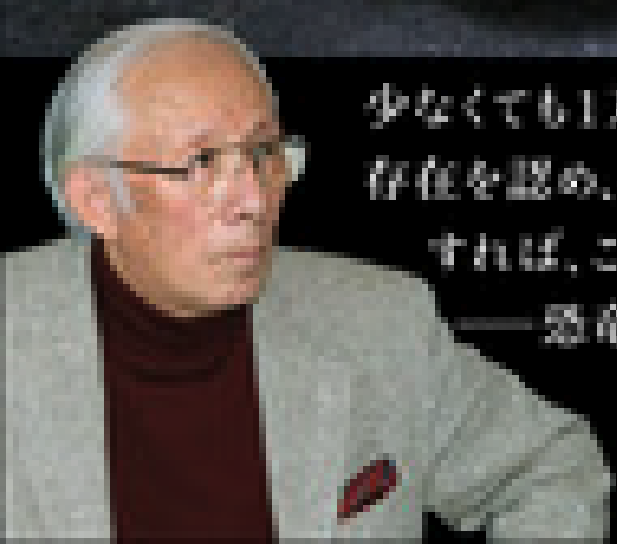
龍蛇族探求の原点

【イカの線刻石】

宇宙的な人類のルーツを告げる驚異の超オーパーツ





少なくても1万2千年は前のものだ！この線刻石（ペトログリフ）の存在を認め、その刻まれた情報を虚心坦懐に調査すれば、これまでの常識（パラダイム）は完全にひっくり返る!!

――恐竜と共に滅んだ謎の超先史文明の解明

浅川嘉富



004

龍蛇族探求の原点【イカの線刻石】

浅川嘉富

ヒカルランド

SAMPLE

１万５千年前の線刻石が語りだす：
先史文明は、やはり彗星の衝突で滅びたのか⁉



イカの古代人は、なぜ、天体それも彗星に、これほど関心を持っていたのだろう。地球を一変させ、先史文明を滅亡させたのがひとつの彗星だったことを、彼らは知っていたからにちがいない。

SAMPLE

現代の最先端医療が、その時代ではあたりまえ!?
文明とは、退化するものだったのか……



イカの古代人は、心臓移植まで行っていた！
現代の医療技術すら上回るかもしれないその技術は、先史文明から受け継がれたものだ。
解剖図さながらの正確な描写がその証。

SAMPLE



今、まさにメスが入れられようとしているのは、頭蓋骨。
この硬い骨に守られた、生命をつかさどる脳が、何物にも替え難い器官であることを、彼らは確かに知っていた。

SAMPLE

6500万年前の恐竜と500万年前の人類が共存？？？
セントラル・ドグマは、完全に崩壊している……



間違いなく、恐竜は人類と共存していた！
そうでなければ、恐竜の成長過程をこれほど克明に描けるはずがない。
オタマジャクシのような姿から２本足の幼生、そして４本足となるプロセスは、
古生物学者が主張する爬虫類的成長とは、明らかに異なる。

SAMPLE



イカの線刻石が偽物であるなら、恐竜の存在すら知らないインディオが、
恐竜図鑑さながらの絵を彫れたのは、なぜ？
それが存在するというゆるぎない事実は、数々の科学の定説を根底から覆す！

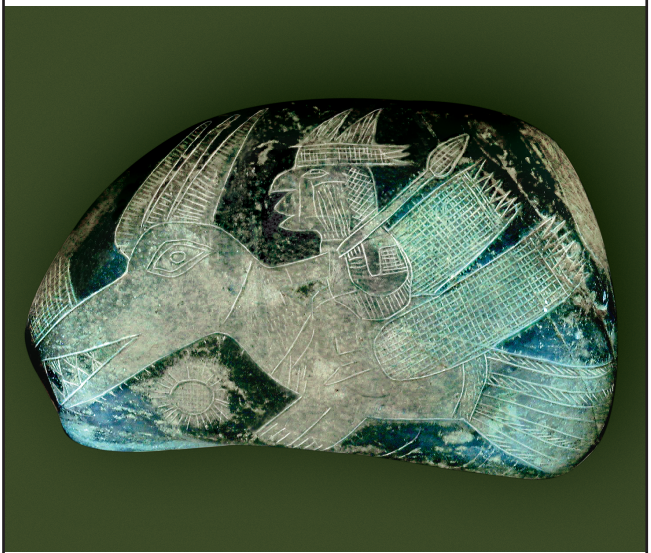
SAMPLE

古代人は、恐竜さえも飼いならしていた!!
考古学上、あってはならないシーン。



人間と恐竜との決死の戦い。野生の大型恐竜は、人類の天敵だったのだろうか？それとも、家畜として育てる子どもを捕獲するために、邪魔立てする親に刃をつきたてたのだろうか？

SAMPLE



飼いならした翼竜の背に乗って、古代人は空を飛んでいた！
巨大生物は、人々の暮らしを助け、戦争においては、強力な武器であり、兵士だった。

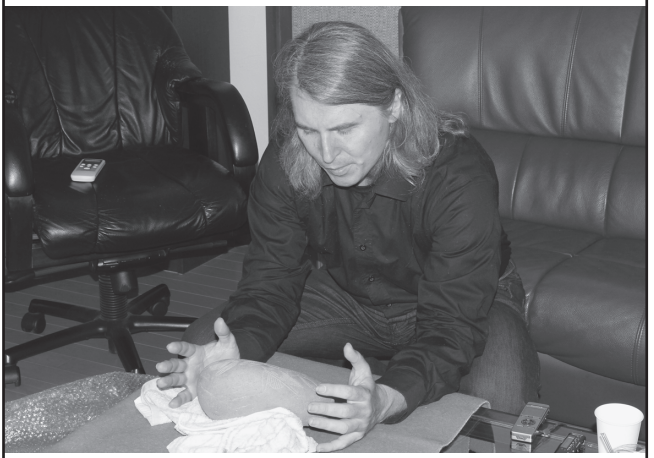
SAMPLE

三葉虫も恐竜も、
つい最近（１万５千年前）まで生きていた！



５億年も前に絶滅した生物を、イカの先住民はなぜ、これほど熟知していたのだろう。背びれや両脇の部分まで克明に描かれた三葉虫は、まるで図鑑を見ているようだ。

SAMPLE



ペトル・ホボット氏はバジリオ・ウチュヤ氏から頂いたカブレラストーンに手をやり、強いエネルギーを感じると語っていた。私とは過去世からの縁のある石だという。（浅川氏自宅にて）

SAMPLE



ヘリコプターから撮影したカワチ遺跡　ナスカに隣接するカワチ、そこからは6000年以上前のピラミッド型神殿が発掘されている。その時代のシャーマンたちはパラレルワールドを行き来していたのだろうか。

SAMPLE



カブレラストーンを撮影する著者　カブレラストーン保存会のメンバーとなった著者は4日間に渡る撮影を許可され、100個を超す貴重な石を撮影することが出来た。これだけの数の鮮明な写真を所持するのは、著者をおいて他にいない。

SAMPLE

序文

先に徳間書店から発刊された『恐竜と共に滅びた文明』が、改めて今回ヒカルランドから文庫本として出版されることとなった。

発売直後にフジテレビ系の『奇跡体験！アンビリバボー』の中で、本書のテーマであるカブレラストーンが取り上げられたこともあって、たくさんの方に読んで頂けたのはうれしい限りであった。

発刊されたのは、ちょうど２００４年８月のアテネオリンピックの最中であったから、あれから丸７年が経過したことになる。その後、世の中は色々な意味で大きく変化し、物の見方も３次元的な見方から脱却し始めて来ているというのに、考古学の世界は依然として閉鎖されたままである。

そのために、世界各地に残された謎の遺跡やオーパーツと呼ばれる不思議な発掘物などの解明は、手つかずのまま今日に至っており、私のようなアマチュア研究家たちの主張は

SAMPLE

一切無視されて、真実は今もなお厚いベールの下に隠蔽されたままである。

エジプトの三大ピラミッドは４５００年前のクフ王一族の建造物であり、ペルーのアンデス山中に残されたマチュピチュ遺跡はインカ帝国時代の都市跡で、ナスカの地上絵もまた、２０００年前のナスカ人によって作られたものである、とされたままである。

９年前に出版した『謎多き惑星地球』（ヒカルランドから文庫として再版予定）やその後の著書で述べてきたように、そうした考古学者の主張が歴史の真実からはほど遠い、虚偽と思い込みの世界の産物であることは、私の読者なら既にご承知の通りである。

「ピラミッド建造者＝クフ王」説を裏付ける証拠はたった一つしかなく、それは、「重量軽減の間」の石材に描かれたカルトゥーシュの中に描かれたクフ王の名前だけである。しかし、その証拠物は発見者であるハワード・ヴァイスがみずからペンキで描いた偽物であることを示す傍証が明らかになっているというのに、こうした不都合な点については学者は知らぬ存ぜぬで押し通しているのである。

マチュピチュ遺跡の建造者もナスカの地上絵の描き手もピラミッドと同様、学者が主張しているインカ人やナスカ人とは異なり、彼らより遥かに古い時代に登場する、我々が忘れ去ってしまった人々であった。こうしたことも、真摯にして謙虚な態度で調べてみればすぐに分かるはずなのに、学者たちはおのれの名声と地位を守らんがため、意図的に目を

SAMPLE

背けたままである。

本書のテーマであるナスカの近くのイカの砂漠で発見された「カブレラストーン」と呼ばれる石もまた同様で、ピラミッドやマチュピチュが建造された先史文明、あるいはそれ以前の遺物である可能性が大きいというのに、真剣に研究しようとする学者が一人として出て来ないのが現状である。

ところで、カブレラストーンを目にして誰もが最も驚かされるのは、そこには恐竜の姿が人間と共に描かれており、恐竜と人類が共存した時代があったことを伝えていることである。

私は本書の中で自分なりにその謎を解く一つの仮説を述べているが、それとは別に、2年前に出会ったチェコの超能力者でシャーマンでもあるペトル・ホボット氏は、大変興味深い意見を語っている。

彼の考えを要約すると、およそ次のようになる。

カブレラストーンに描かれた恐竜は6500万年前に存在していた恐竜の生き残りではなく、先史文明が滅亡してからしばらくした後、およそ8000年ほど前に誕生した今はなき文明のシャーマンたちが、ナスカ一帯の開かれた「次元の扉」を通って、パラレルワールドから連れてきたものである。

SAMPLE

また、カブレラストーンに描かれた恐竜の絵は、そうした次元が交差する特殊な空間に住む恐竜と人間の姿を見た人々が書き残したもので、それらの多くはシャーマンたちがヒーリング（霊的治療）に使うために作ったものであった（詳細は『ＵＦＯ宇宙人アセンション』真実への完全ガイド』（ヒカルランド刊）参照）。

我が国ではあまり知られていないことであるが、ナスカに隣接するカワチ地方からは砂漠に埋もれた太古の都市跡が発見されている。その中の最も大きなピラミッド型神殿の地下で発見された薪（たきぎ）の測定年代から、遺跡が今から６０００年以上前のものであることが明らかとなっている。そうした点を考えると奇妙に思えるホボット氏の意見も、決して絵空事とは言えなくなってくる。

実は、私がカブレラ博物館を訪れた年の2年ほど前に、ホボット氏も博物館を訪ねていたようで、その時同行したアマゾンのシャーマンもカブレラストーンを手にして、ホボット氏の考えを強く支持したようである。読者は、こうした考えもカブレラストーンの謎を解く一つの仮説として、頭に入れておかれたらいかがだろうか。

それにしても驚かされたのは、本書の最後に、カブレラストーンの発掘者バジリオ・ウチュヤ氏から、彼が所持する最後の石を頂くことになった経緯が記してあるが、我が家を訪れたホボット氏は強力なエネルギーを発するこの石を目にして、「これは、あなたが何

SAMPLE

代か前の前世でシャーマンをしていたとき、ヒーリングのために使っていた石だ」と、語ったことであった。

私が6回にわたる前世で、南米のアマゾンやアンデスなどでシャーマンをしていたというホボット氏の話が、どうやら事実であったことは、『世界に散った龍蛇族(りゅうだぞく)よ！』の読者はご承知の通りである。奇しくも死の床に伏していたウチュヤ氏から頂いた石が、そうした過去世の縁で私の元にやって来たこともまた、大きな驚きであった。

確かにそうした縁がなければ、カブレラ博士の娘さんからカブレラストーン（イカの線刻石）保存会の10人のメンバーに加えていただいたり、4日間にもわたって写真撮影を許されたり、発掘に関する貴重な秘話をお聞きすることなどできなかったに違いない。

読者におかれては、そうした経緯を頭に入れて読んで頂ければ、カブレラストーンに親しみを感じられ、また私の主張する点もより理解してもらえるのではないかと思っている。本書が世界で最も不思議な石であるカブレラストーンの謎解きの一助となって頂けたら幸いである。

SAMPLE

この書を、イカの石の収集とその研究に生涯を捧げた故カブレラ博士の霊前に、
そして次なる大カタストロフィーに遭遇するかもしれない、
幼い子供たちを代表して、孫の温人と、
執筆中いつも傍らにいて励まし続けてくれた愛猫チロに捧げる

SAMPLE

プロローグ

前著『謎多き惑星地球（このほし）』（徳間書店）を書き上げた後も、ペルー探索の際、通訳とガイドを務めてくれた、セサル・ラトーレとの交友が続いていた。

セサルの本職はミュージシャンである。彼の演奏するアンデス音楽は魅力的で、ペルーはもちろん、我が国にも多くのファンがいる。彼には、故郷の村に、学校を造るという長年の夢があった。

有名なインカの遺跡、マチュピチュやサクサイワマンに沿って流れているのが、ウルバンバ川である。ボリビアとの国境に近いチチカカ湖周辺を源流とするこの川は、ウイルカパンパ、ヴィルカバンバ、ビルカノータと、途中、何度もその名を変えながら流れ下り、隣国ブラジルに入ると、アマゾン川となって大西洋へと注いでいる。セサルが学校を建てようとしているのは、クスコからこのウルバンバ川を３００㎞ほど下った、ジャングルの中にある寒村である。

SAMPLE

彼の夢の実現に協力するようになって、4年ほどになる。きっかけは、インカ遺跡の探索の途中、彼が私に見せてくれた1枚の写真だった。そこには、くるぶしまで水に浸かった子供たちが、ウサギ小屋のように粗末な校舎で授業を受けている風景があった。

ペルーは6月から9月にかけて、雨期に入る。この間、雨漏りする屋根とガラスの入っていない窓の教室は、雨を防ぐことはできない。かといってこの間休校にしていたのでは、1年の3分の1が雨期休暇になってしまう。そのため、水浸しの教室で、授業は続けられていたのだ。

しばらくして、現地の村から、新しい学校の開校式をしたいので、訪ねて欲しいというメッセージが届いた。折りしも、私はペルー、コスタリカ、グアテマラ、メキシコの4ヶ国探索の予定があり、訪問先と打ち合わせを進めていた。目的は、ペルーではインカの地下トンネル調査の結果を聞くこと、コスタリカは謎の大石球を見ること、グアテマラはマヤの遺跡を訪ねること、そしてメキシコは、アカンバロという田舎街にある小さな博物館を見学することである。そこで、この旅程に8日間プラスして学校を訪ねることにし、セサルに学校訪問の手配を頼むことにした。

ペルーに向けて旅立つ2日前の夜、私は自著の読者のひとりと夕食を共にした。アカンバロの博物館に、人間と恐竜の共存を物語るたくさんの恐竜土偶が展示されていることを

SAMPLE

語ったとき、彼は一瞬、怪訝そうな顔で私を見つめた。それも当然だろう。恐竜は650万年も前に絶滅したとされている。その恐竜が人間と共存するなど、あろうはずがない。

「ペルーにも同じようなものがありましたよね。確か〝イカの石〟と言っていたと思いますけど。そこにはいらっしゃらないのですか」

「イカの石」という言葉を聞いて、私は、数年前、ナスカの地上絵を見た帰りにその石を見ようと、イカの町に立ち寄ったことを思い出した。その時には、所在地に関する情報が一切なかったため、お目当てのイカの石を展示している博物館は探し出すことはできなかった。

それを知った彼が送ってくれた1冊の本が届いたのは、まさに成田に向かって玄関を出たときのことである。茶封筒を開封しながら、私は「イカの石」との間に、赤い糸が結ばれたことを強く感じていた。もし宅配が数分遅れたら、私とイカの石との出会いは、ずっと後になったはずだ。

かくして、私は機中で2人のドイツ人が書いた『ICA模様石に秘められた謎』（文藝春秋）を読むことになった。読み始めると、思っていた以上におもしろい。そこには、イカの町に住むカブレラ博士という医師が、60年代の初め頃から、町の近くの砂漠で発見された不思議な石を集めていること、その石には恐竜のみならず天体観測や外科手術の様

SAMPLE

子など、信じ難い絵が彫られていることなどが述べられていた。著者が言うように、その石が歴史的な遺産であるならば、古代のイカの人々は恐竜と共存し、天文学や医学の面で先進技術を有していたことになる。それはすなわち、先史文明の存在を物語るものにほかならない。

なんとしてもカブレラ博物館を訪ねなければ……。しかし、今回のタイトな日程では、新たな予定を加えるのは不可能に思えた。イカはペルーの首都リマから車で4～5時間の距離にあり、じっくり見学するには、最低でも2日は必要だ。それに、この本にもカブレラ博物館への行き方は載っていない。闇雲にイカに行ったところで、前回の二の舞になりかねなかった。

前著で、私は先史文明の存在を、インカやエジプト、マヤ、オルメカの古代文明遺跡の中から探そうと試みた。イカの石やアカンバロの土偶も、その存在を証明する大きな手掛かりになるのではないか――読み進むにつれ、その思いは募る一方だ。

そこで、隣の座席で気持ちよさそうに眠っているセサルを起こし、ペルー滞在の10日間の日程をやりくりし、リマに立ち寄る時間を作れないか聞いてみた。

「学校を訪ねる日程を、2日間短縮しましょう」

訪問予定の学校4つのうち、いちばん奥地にあるサリンガベニまでは、クスコから車で

SAMPLE

3日、船で1日かかる。現地の学校に滞在する2日間は縮めようがないので、イカ探索の時間を作るには、往路、復路で1日ずつ詰めるしかない。

セサルは、車やジャングルの中で寝泊まりする覚悟さえすれば、それは可能だという。

「運転手を2人つけて、夜中も走るようにしましょう。そうすれば大丈夫です」

しかし、ことはそんなに簡単ではないことも分かっていた。4千メートルのアンデス越えと、ウルバンバ渓谷沿いの険しい山道なのだ。そんな道を、夜を徹して走る。一歩間違ったら、再び日本の地を踏めなくなることは、これまでの探索で十分経験済みだった。

無理すべきか、止めるべきか……。ペルーに着くまでの数時間、探求心と不安とのせめぎ合いが続いた。結局、私の性癖である好奇心は、今回もまた退き下がることはなかった。

リマ国際空港に降り立った私は、旅程の変更をセサルに告げていた。

SAMPLE

序文 13
プロローグ 20

第1章　歴史の常識を覆すイカの線刻石

カブレラ博物館 36
恐竜は人類と共存していた！ 38
カブレラ博士の確信 42
偽造説を検証する 48
戦う恐竜・使役化された恐竜 54
爬虫類進化説は否定された!? 59
高度な外科手術のリアルな記録 63
イカの線刻人が記した大惨劇 73

SAMPLE

古代の幻影から現実の世界へ 82
エウヘニア・カブレラを訪ねる 86

第2章　アカンバロの恐竜博物館

ヴァルデマール・ユルスルート博物館 92
未知の恐竜と出会う 93
発見の経緯 101
ハプグッド教授のユニークな調査 106
アカンバロの人々は恐竜の姿を見ていた！ 111
恐竜は最近まで生きていた！ 116
古代のタブレットに刻まれた「恐竜」と「謎の象形文字」 123

第3章　恐竜と人間の共存を裏付けるこれだけの証拠!!

SAMPLE

進化論を踏みつける足跡 130
「進化論科学者」VS「創造論科学者」 134
パラクシー川における発掘 136
それはまぎれもなく人間の足跡だ！ 139
大洪水から逃げる恐竜と人間 142
ローカスAでの発見 147
地層の逆転現象が意味するもの 154
大洪水を確証する恐竜の化石発見！ 157
人間の毛髪、歯、指 159
テキサスの鉄製ハンマー 163

第4章　創造論科学が明かす「地層・化石生成」の真実

地上の生命体はたった7日で誕生した！ 168
全米成人の半数近くが創造論を支持 171

SAMPLE

地層は極めて短期間で形成される！ 176
上の地層に「複雑・高等な生物」の化石が存在する理由 182
創造論者の主張を立証する事実がある！ 186
化石は大洪水によって作られた！ 188
「化石の森」もわずか数十～数百年でできた！ 192
地層形成の謎を解く多層貫通化石 195
20世紀半ばのワイヤや時計も化石に！ 198

第5章　放射性年代測定法の幻想

絶対年代を測定する3条件 202
信頼性を欠く放射性年代測定法 205
測定年代が数桁も違う！ 208
「炭素14測定法」は年代測定の切り札になるか 212
大洪水を証明する炭素14増大曲線 214

SAMPLE

遺伝学も大激変説を裏付けている！ 217
地球年齢46億年説を否定するこれだけの論拠 222

第6章　恐竜絶滅の真相

「天体衝突説」を否定する4事実 230
どれも決め手に欠けている！ 234
異常卵や奇形種の発生は重力増のストレス 238
大型恐竜は立つことさえできなかった！ 243
ブラキオサウルスは400kgの心臓を持っていた？ 247
翼竜は飛び立てなかった!? 250

第7章　恐竜と先史文明を滅ぼした大洪水

大激変の目撃者がいた！ 256

SAMPLE

マチュピチュはなぜ空中都市になったのか 260
海面は今より2千m以上も低かった！ 262
月は氷惑星だ！ 265
かくして月は地球の衛星になった 268
「天体M仮説」 271
探査機のデータが証す「月」誕生の経緯 274
月の「不思議」は空洞化で解明できる！ 278
月のコアの一部は地球に飛来していた！ 281
地球の自転は今より数倍速かった！ 283
大型恐竜や翼竜を存在せしめた大気の組成 287
重力変化は植生も激変させた！ 289
大洪水前の巨人 292

第8章　線刻石（カプレラ・ストーン）が語る歴史の真実

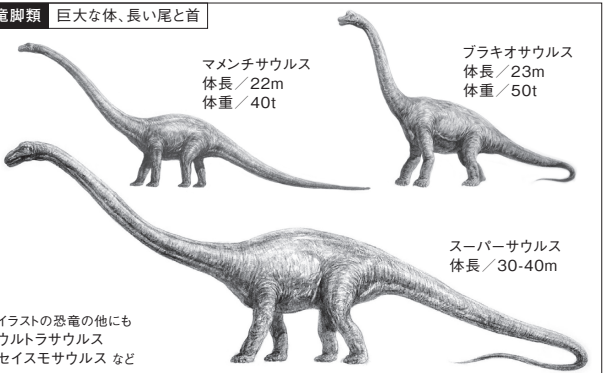
SAMPLE

再びペルーへ 300
因縁の石との遭遇 302
ペルー空軍も信憑性（しんぴょうせい）を認定！ 304
不思議なモチーフ 306
線刻法の謎 312
ウチュヤは偽物作りの第一人者だった！ 314
同性愛が日常化していた!! 320
ナスカの地上絵 324
エピローグ 327
参考・引用文献 338

SAMPLE

恐竜分類図

竜脚類 巨大な体、長い尾と首



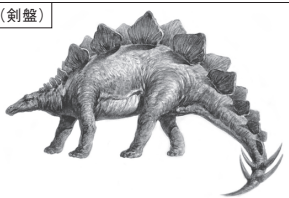
イラストの恐竜の他にも
ウルトラサウルス
セイスモサウルス など

獣脚類 肉食



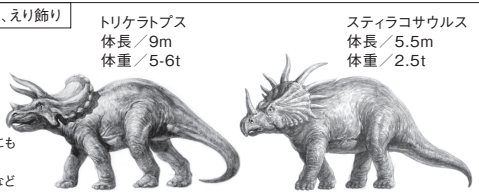
イラストの恐竜の他にも
スピノサウルス
アロサウルス
コンプソグナトゥス など

剣竜類 背中に骨の板（剣盤）



イラストの恐竜の他にも
ケントロサウルス など

角竜類 巨大な角、えり飾り



イラストの恐竜の他にも
パキリノサウルス
ペンタケラトプス など

SAMPLE

曲竜類 鎧、ハンマーのような尾



アンキロサウルス
体長／10-11m
体重／4t

イラストの恐竜の他にも
ノドサウルス など

鳥脚類 草食恐竜中唯一、2足歩行ができた



テノントサウルス
体長／6-7m
体重／1t



イグアノドン
体長／9m
体重／5t

イラストの恐竜の他にも
カモノハシ竜 など

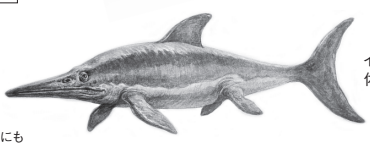
翼 竜 翼を持ち、空を飛ぶ



ケツァルコアトラス
翼巾／12m
体重／90kg

イラストの恐竜の他にも
ランフォリンクス
プテラノドン
デイモフォドン など

魚 竜 海に生息



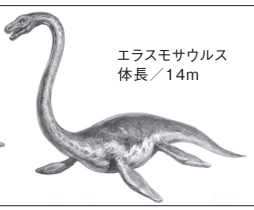
イクチオサウルス
体長／2-10m

イラストの恐竜の他にも
ミクソサウルス など

首長竜 巨大なヒレ足、長い首

プレシオサウルス





エラスモサウルス
体長／14m

イラストの恐竜の他にも
プリオサウルス など

SAMPLE

第1章　歴史の常識を覆すイカの線刻石

SAMPLE

カブレラ博物館

ペルーの首都リマを出発したボルボは、南アメリカ大陸を南北に縦断するパンアメリカン・ハイウェイをひた走っていた。左右に広がる荒涼とした砂丘は、あらゆる植物の生育を拒否しているかのようで、車窓に広がる景色の中に、草木の姿はまったく見当たらない。

そんな荒涼とした景色の中を走ること約4時間、砂漠の中に忽然（こつぜん）とオアシスが見えてきた。それが我々の目的地イカの町である。

荒々しい砂漠から街中に入ると、緑の木々がなんとも愛おしく思える。16世紀にインカを征服したスペイン人、ドン・ヘロニモ・カブレラによって建設されたイカは、観光地化されていないためか、物売りや派手な出店がなく、落ち着いた静かな町である。しかし、路地に一歩入ると、そこには古代からこの地に住むインディオの暮らしの息吹（いぶき）が感じられ、活気にあふれている。我々がこれから訪ねようとしている「カブレラ博物館」の所有者ハビエル・カブレラ・ダルケア博士は、この町の設立者の直系の子孫だった。過去形で述べたのは、訪ねてみて初めて分かったのだが、残念なことに、博士は1年半ほど前に他界していたからである。

SAMPLE

カブレラ博物館は、イカ大学で教鞭を執る傍ら、開業医としても第一線で活躍していた博士が、自らの診療室の一部を改装した私設の博物館で、観光案内書やパンフレットの類には一切載っていない。そのため、我々は入国するや否や、その所在地を突き止めるのに躍起になった。その甲斐あって、かつてカブレラ博士の秘書を務めていた女性を、なんとか探し当てることができた。さっそく連絡したところ、博士の亡き後、彼女自身が博物館を管理しているとのことで、快く見学を許可していただけた。

街の中心にあるアルマス広場に立ち、彼女から教えられた一角を眺めると、黄色の建物が目に留まった。そこがカブレラ博物館である。

この博物館には、今から40年ほど前の最初の発見以来、博士が収集した「カブレラ・ストーン」と呼ばれる「奇妙」な線刻石が展示されている。なにゆえ奇妙なのか。それらの石には、正統派学者に言わせれば、あるはずのない、また、あってはならない絵が彫り刻まれているからである。

着いたのが昼休みで閉館中だったため、彼女の自宅に電話を入れて、待つこと十数分。白髪の交じった、70歳代の上品な女性が現れた。博物館の実質的な責任者エンマ・エルナンデス・アグアドさんである。

彼女に案内されて館内に入った我々は、目の前の光景に思わず息を呑んだ。大小さまざ

SAMPLE

まな石が棚や床に所狭しと並ぶその様は、さながら石の図書館だ。想像を遥かに超える数の多さに圧倒されてしまった私は、茫然自失。しばらく言葉が出なかった。

恐竜は人類と共存していた！

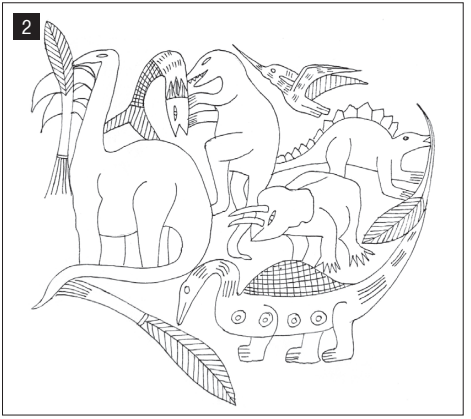
展示された石の数は1万個以上、ここに展示しきれない石も別の場所に保管されているという。入館早々、度肝を抜かれた私は、石に彫られた絵を見た瞬間、さらなる驚きに遭遇する。そこには、遠い昔に絶滅し、人類が目にしたはずのない恐竜の姿が、克明に描かれていたからだ。

背中に2列に並んだ剣盤（板状の骨）がはっきりと分かるステゴサウルス、長い首と巨大な胴体のブラキオサウルス、頭に3本の角を持ったトリケラトプス、肉食獣のティラノサウルス……石に刻まれたこれらの絵を眺めていると、遥かな過去の世界に誘われていくようだ。

単に恐竜の姿が彫られているだけではない。そこには、恐竜と人間との共存を裏付けるように、恐竜の首を切り取る恐竜狩りのシーンや、ティラノサウルスに頭をくわえられた人間の姿など、映画『ジュラシック・パーク』さながらの情景がリアルに描かれている。

SAMPLE





1　巨大シダ類の葉をついばむ大型恐竜ブラキオサウルス、大魚を喰う肉食恐竜ティラノサウルス、空を飛ぶ最小恐竜マメハチドリなど、映画「ジュラシック・パーク」の一場面のよう。カブレラ博士によると、イカの線刻石には、古生物学の研究成果と一致する、少なくとも37種の恐竜が描かれているという
2　1の石の模写

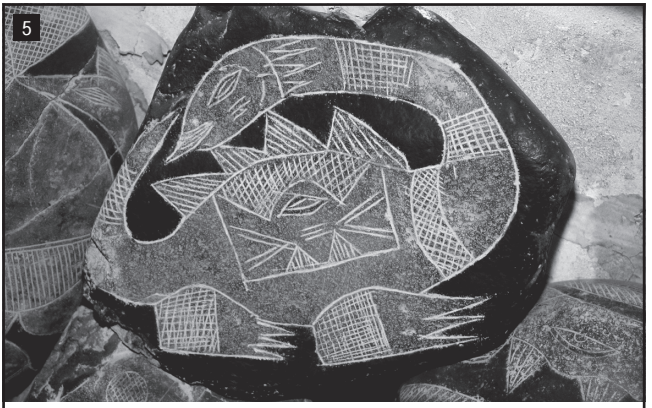
SAMPLE





3　鼻の先とえり飾りから突き出た３本の角が特徴のトリケラトプス
4　背中に２列に並んだ剣盤をつけたステゴサウルス。周囲に描かれているのは、食いちぎられた人間の首と胴体。草食動物の剣竜類にも、こんな凶暴な面があったのだろうか

SAMPLE





5　腰を下ろした恐竜。首の長さから竜脚類に思えるが、背中には剣竜類特有の剣盤がついている。おそらく、ブラキオサウルスとステゴサウルスの混血種だろう。こうした種の存在は現在確認されていないが、それらが空想の産物と断定できるほど、これまで発見された恐竜の化石は多くない。首輪や鞍らしきものが描かれていることも興味深い

6　丸い目に大きな耳、皮膜でできた翼に長細い足は、まぎれもなく巨大コウモリ、メガクイロプテロスだ。恐竜図鑑でも見かけることが少ないこの翼竜を、イカの先住民はなぜ知っていたのだろう

SAMPLE

これらはいつの時代、いかなる人々によって彫られたものだろう。

学者が説くところでは、恐竜たちが生存していたのは、今からおよそ2億5千万年前～6500万年前の中生代（ちゅうせいだい）と呼ばれる時代である。一方、人間の遠い祖先がこの世に出現したのは、せいぜい500万年前、現代人類の形態を持ったホモ・サピエンス・サピエンスに至っては、わずか10万年前のことである。

両者の間には6千万年以上もの、長大な歳月が横たわっている。もし学者の主張が正しいなら、人類が恐竜の姿を目撃し、その姿を石に彫るなどということは、あり得ない。

しかし、現に我々が今目にしているのは、まぎれもなく人間が刻んだ恐竜の姿である。それも、空想によって描かれた類のものでないことは、その生き生きとした描写を見ればよく分かる。6千万年もの時空間は、いったいどこへ行ってしまったというのだろう。

謎解きは後章にするとして、まずイカの石について、詳しく説明することにしよう。

カブレラ博士の確信

イカの石が人々の目に初めて触れたのは、1960年代の初めである。

イカの街は地上絵で有名なナスカから北上すること約200km、荒涼とした「オクカヘ

SAMPLE

砂漠」のほぼ中央に位置する。周辺にはイカ川を始め、アンデス山脈を水源とするいくつかの川が流れているが、これらの川は、雨期以外は太平洋に到達する前に枯れてしまい、砂漠を潤すことはない。散在するオアシス周辺が孤立した街になっているのは、そのためである。ところが1961年、アンデス地方に降った数十年ぶりの集中豪雨によって、イカ川が氾濫。大奔流は周辺の厚く積もった砂を海へと押し流し、地中深くに埋められていた大量の石が、地表へと押し出されたのである。

この地方に古くから住むインディオの間に、不思議な絵が刻まれた石があると囁かれるようになったのは、それからしばらくしてからのこと。以前から、古い墓を見つけては、掘り出した埋葬品を売り飛ばし、生計の足しにしていた彼らが、こうした石を見過ごすはずはない。石の売り値はわずかだが、食うや食わずの彼らにとって、それは貴重な収入源となった。

こうして拾い集められた石は、イカ周辺の金持ちや好事家の手に渡っていった。そのひとつが、友人を通じて、カブレラ博士の手元に届くところとなった。

生前、博士はこう語っている。「その当時、私は考古学などには一切興味がありませんでした。ですから友人の写真家フェリック・ローナーが、誕生プレゼントにくれた線刻石も、しばらくは処方箋をとめるペーパーウエイト（置き石）にしていました。ところが、

SAMPLE

ある日、何気なく見ていた石に刻まれた魚が、神話に出てくる動物に似ていることに気づき、詳しく調べてみようという気になったのです」

ペルー医学会の重鎮ハビエル・カブレラを考古学の世界へと誘い、人生を大きく変えることになったひとつの石。それは、カブレラ博物館の展示室にある博士の机の上に置かれている。展示されている数々の線刻石は、絵図が鮮明に見えるように薄いクリーム色に塗ってあるが、これだけは薄褐色で、掘り出されたままの状態なのは、博士にとって特別の石だからだろう。20cm×10cmほどの小ぶりな安山岩に描かれているのは、白亜紀に絶滅したはずの「魚竜」である。

やがて、博士の元には、診察料代わりの線刻石が、貧しいインディオによって次々と持ち込まれるようになる。もちろん、こうした線刻石が、遥か昔に彫られたものだと、無条件に信じたわけではない。彼らが金目当てに彫った可能性も、十分にある。

真贋を確かめるために、博士は診療の合間をぬって、石がどこから集められたのかを調べることにした。博士がまっさきに試みたのは、患者のひとりで、他のインディオよりも数段多くの石を持っていそうなバジリオ・ウチュヤを呼んで、石の出所を聞き出すことだった。「線刻石は特定の場所に集中して存在するはずだ。ウチュヤがたくさんの線刻石を集められるのは、その場所を知っているからだ」と考えたのである。

SAMPLE

7



9



8



7　カブレラ博士が最初に手にしたイカの石。この石には、カブレラ博士を考古学の世界へ導くことになった太古の魚竜が彫られている
8　棚に並べられない大きな石は床に置かれている
9　在りし日のカブレラ博士

SAMPLE

博士の推測は正しかった。ウチュヤはある場所に、「石の巣」を見つけていたのだ。日頃から世話になっている博士には、いつまでも口を閉ざしているわけにはいかず、とうとう彼は、家族にも秘密にしていた発掘場所へと、博士を案内することにした。そこはオクカへ砂漠の小高い丘に掘られた洞窟（どうくつ）の入り口で、線刻石を彫った人々が保管場所にしていたらしい。博士は一定の値段で買い取ることを条件に、発掘した石はすべて、自分のところに持ってくることを約束させた。

こうして博士が所有する石はしだいにその数を増し、いつしか診療所の一部屋を、保管所として空けなければならないほどになっていた。

それらの石を丹念に調べるうちに、そこには、恐竜やトクソドン、メガクイロプテロスなどの絶滅動物だけでなく、望遠鏡らしき装置を使って天体を観測している人間の姿や、大洋に囲まれた8つの大陸を表したと思われる世界地図、それに、心臓手術などの高度な外科手術を施（ほどこ）している絵までもが、描かれていることが分かってきた。

この付近の農民は、読み書きすら満足にできないインディオたちである。身近にある動植物ならともかく、恐竜や三葉虫（さんようちゅう）の絵など見たこともない彼らが、その姿をこれほど詳細に描けるだろうか。ましてや、心臓手術の様子など、彼らには想像すらできないはずだ。

さらに博士に確信を抱かせたのは、発見された石の数である。その時点で、博士のもと

SAMPLE

に集められた石だけでもすでに6千〜7千個、他の好事家や収集家、それに、関心を持ち始めた研究者の手に渡ったものまで含めると、その数は1万個を超していた。仮に、彼らが10個ずつ作ったとしても、1万個ともなれば年中無休で1千日、つまり3年の歳月を要する。それほどの年月を、本業の農業を放棄してまで、石彫りに専念するはずがない。

また、中には直径が1mを超える巨大な線刻石もある。こうしたものに、構想通りの詳細な描写を彫り込むのは、容易ではない。完成させるのに数ヶ月もかかりそうな細かい図案もあることを考えると、これほど大量の線刻石を作るには、3年でも足りないだろう。

もうひとつ、これらの石を偽物とするには、致命的な問題がある。高度な医療現場の様子や詳細な恐竜の生態図などが、専門知識や資料を持っていない農民の手だけで作れるものでないことは先述した通りである。だとすると、恐竜や天体観測、医学の分野などに専門知識がある絵図面書きと、彫り師たちのプロジェクトチームが存在していたことになる。もし、それだけ大がかりな組織があるなら、砂漠に囲まれた田舎町のことだから、すぐに隣人や行政当局の目に触れてしまう。人目につかずに、1万個もの石を、長期にわたって彫り続けるのは、不可能に近い。だいいち、そんなことをして、なんの得になるというのか。金目当てなら割の合わない仕事だし、遊び心にしては念が入り過ぎている。

調べれば調べるほど、博士の頭の中から「偽作説」は消えていった。

SAMPLE